

自分に向き合うとは？

人と人の間柄としての人間は、「距離と現存」の共存の中で生きているのであり、その「距離と現存」が自分個人の中にもあるということ、この前に書きました。そこから、次のような問いへと誘われました。「自分に向き合う」とは、いったい誰が自分に向き合うのか。実は、ここには多くの人が落ち込む陥穽があります。「向き合う」ということが、一方通行ではなく、双方向からの行為が交差する事態であることを、まず確認しておきたいのですが、自分に向き合うのは、自分以外にはありませんから、「自分が自分に向き合う」のです。その場合に、自分は、双方向において主客に分かれ、自分 A が自分 B に向き、また自分 B が自分 A に向くということになります。自分が二つに分かれているのです。いったい、これはどういうことでしょうか。

「自分が自分に向き合う」ことを、意識の「志向性」(intentionality)の観点から考えてみます。一般に、意識はいつも何ものかについての意識です。知覚であれ、感情であれ、想像であれ、意識は常に対象を持っており、意識の志向作用は対象と一組です。人間の意識の固有性は、対象に向かう意識が逆方向に屈折して自分自身を見ることができる点にあります。この自分自身を見ることが、「自己意識」(精神)の働きであり、その本質は反省する(reflect)ことです。対象を見る意識を見る自分というように、いわば見ることが自乗化されるのです。自分は、対等の資格で自己意識を持つ多くの他者に向かい合い、他者と交わる一方で、自分の世界に自閉する傾向があります。それは自己の関心と執着で磁化された世界であり、このレベルの第一次反省は、たいてい主客(つまり、意識と対象)へと注がれますので、その自分を「自我」と呼んでおきます。

ところが、その自我が、眼差しを転換する機会が訪れます。後ろを振り向く瞬間です。「かえりみる」とは、後ろを振り返ることであると同時に、反省することであり、眼差しを転換する自分は、「顧みる・省みる」という、自他を同時に視野に入れる第二次反省の契機と不可分です。この後ろを振り返ることを、プラトンの洞窟の比喻に倣って「後ろを見る眼」と言ってもよいし、「観の転換」と言ってもよい。自分の眼差しが、異次元(象徴的には高みや深みの垂直方向)へと転じられて、対象を見る意識を見る自分を見る眼というように、見ることが三乗化されるわけです。自分の内奥の眼が開かれる、一種の開眼です。

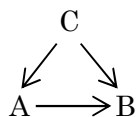
こうした第二次「反省」の契機と不可分の自分は、「自覚」の観点から捉えることができます。「自覚」ということを「自分が(自分に於いて)自分を見る」という公式で表わせば、上述した事柄は、次のように捉えられます。この境位では、自我は見る主体ではなく、見られる対象ですから、「自分が(自分に於いて)自我を見る」となります。では、見る自分とは、いったい誰でしょうか。自我を超えた自分、本当の自分である「真我」です。(もっとも、そんなものはないと思えば、話はそれで終わりです。しばらく彷徨する他ありません。)それゆえ、「真我が自我を見る」のです。自我は原理的に真我が分かりません。真我

が分かるのは、ただ真我のみです。真我が他の真我との等根源性を直観することによって、真我の自覚が生まれると言えるかもしれません。

それでは、「(自分に於いて)」は、どのように解されるのでしょうか。その自分は、無なる自分、無我無心でしょう。真我が自我を見る場合、その主客分立の関係が成り立つための場が不可欠です。それは、真我の自覚がそこから立ち上がり、また自我の仮象もそこへと消えて行くような、無なる存在論的磁場です。要するに、「自分が(自分に於いて)自分を見る」とは、「真我が(無我に於いて)自我を見る」ということに他なりません。この「(無我に於いて)」の契機は、たいてい見落とされます。冒頭で触れた陥穽とは、「自分が(自分に於いて)自分を見る」という公式の、「自分が」と「自分を」について、それが同一の自分だと思い込むことです。あのシャンカラ(8世紀のヒンドゥー教聖者)も、アートマンでないものをアートマン(真我)と混同することを「付託アドヒヤーサ」と呼んで、両者を峻別するよう指導しました。たとえば、家柄や肉体や財宝などは、アートマンではない、つまり非我(無我[アートマンはない]と訳すのは誤り)なのです。自分探しの旅が、たいてい徒労に帰するのは、正にこの真我と自我の混同ゆえです。自己意識として現象する自我と、その内奥で本来実在する真我は、全く別次元のものですが、自我の眼と真我の眼は重なり合っているため、違いに気づかないのです。自我は真我を探し求めて、自我の世界の中を彷徨します。しかし、自我が消えない限り、(無我に於いて)真我は顕わにはなりません。実は、ここで取り上げた問題は、極めて重要なもので、たとえば、祈る主体や我執を捨てる主体を問う際にも、関わって来るものです。さきほどまで怒っていた自分が祈る(あるいは嘆き悲しんでいた自分が祈る)とき、たいてい怒る(悲しむ)自分と祈る自分を、同じ自分だと思うのですが、それは全くの錯覚なのです。

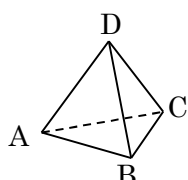
上述した事柄は、次のように図示できるはずですが。

意識が対象を見ることを $A \rightarrow B$ と記します。その事態を見る自分(自己意識)は、 A から B へ向かう矢印が屈折して、 B から C を経由して A へと折れ曲がり、またそこから A 、 C 、 B へと反転する運動の反復を通して生じた自分ですから、 C が $A \rightarrow B$ の二項を眺める状態として纏められます。この ABC の三項連関は、三角形の図形で示せるでしょう。



ところで、この三項連関は、それ自体で成り立つのではなく、三項連関をそれとして認識する高次元の眼(D)の存在を前提としています。自我の内奥にある眼が、三角形を三角形として俯瞰するのであり、二次元平面の三角形は、それを見る眼が介入することで、三

次元空間に位置づけられ、その認識構図全体が立体化されます。三項連関を正三角形で表わせば、その正三角形を上から眺める眼（頂点）を持った「正四面体」の形となります。この正四面体が二つ〔一方は倒立して〕合体したもの（男性性原理と女性性原理の統合したもので、マカバと呼ばれる）が、人間存在の構造や鑄型に関する幾何学的図形の基本形と見なす思想もあります。



D：真我

C：自我

B：対象

A：意識

一つ言い忘れたことがありました。「向き合う」ことは、双方向からの行為が交差することだと言いました。「向く」ことを「見る」ことに置き換えると、「真我が（無我に於いて）自我を見る」ことは、逆に「自我が（無我に於いて）真我を見る」と交差するのではないのでしょうか。答は「イエス」でも「ノー」でもあります。「ノー」とは、自我には原理的に真我が分からず、見えないということです。眼が眼自身を見られないのと似ています。反対に、「イエス」とは、たとえ自我には真我が見えなくても、その自我の想念や行動は、真我に伝わります。それゆえ、自我は真我が見えない様態のまま、真我への働きかけは行われていると言えるわけです。

このように、「真我と自我」の関係は、一見すると非常に分かり難いものです。「いまここにいる自分以外に、本当の自分があるわけではない」と言われて、戸惑う人は多いはずですが、しかし、この「真我と自我」の関係は、「役者と役柄」の比喩に訴えることで、或る程度は類推できるように思うのですが、いかがでしょうか。

(2020/05/26 棚次正和)